主張

みんなで学ぶ　みんなで育む

高来英行

私の教員生活のスタートは、養護学校（現在の特別支援学校）でした。中学部の主に知的に遅れのある四人の生徒の学級担任となったものの、当時の私は、十分な知識も経験もありませんでした。当初は、「小学校の内容を指導して、難しければ更に下の学年の…」という発想しかありませんでした。うまくいかない中で、「彼の見えている世界は、自分のものと違うのかもしれない。聞こえ方も、感じ方も考え方も…それならば、彼ら一人一人に合った指導法を見付けよう」と気付き、学習内容も彼らの人生において最も必要なことを保護者と一緒に考えていきました。今思えば当たり前のことです。三年後、中学校に転勤し、通常の学級の授業を受け持ちました。ある日、テスト結果を見た校長先生から、「苦手な子の支援をお願いします。」と言われました。それまでは「できている生徒も多いのだから、できないのは努力不足だ。」などと考えていました。先輩教員からの「あなたはできる子ばかりを相手にして授業を進めているよ。」という一言には愕然としました。養護学校での学びが全く生かせていなかったのです。それは、通常の学級での指導と養護学校での指導を別のものだと考えていたからであり、私にとって、大きな反省であり気付きでした。

随分後に、通常の学級にも特別な支援が必要な生徒がかなりの割合で在籍していると報

告され、障害のある者が可能な限り障害のない者と共に学ぶ「インクルーシブ教育システム」の構築が叫ばれるようになります。現在は、次期学習指導要領に向けた検討の基盤となる考え方の一つに「多様性の包括」が挙げられています。このような中、私たち校長は「通常の学級に在籍する障害のある生徒への支援」のために、どうあるべきでしょうか。

最も必要なのは、校長のリーダーシップです。「特別な場所で特別な時間に特別な教員が行うのではなく、全ての教育活動において全ての教員が行うものだ。」という認識のもと、カリキュラム・マネジメントを行うことが大切だと思います。

行動問題やいじめ、不登校などの課題については、全ての学校で日常的に組織的な対応がされているはずです。一方、特別な支援が必要な生徒についてはどうでしょうか。実は、この生徒たちの状況を把握して、学級担任や教科担任など、みんなで適切な支援を日常的に行うことで、先の課題の多くは未然に防げる可能性があります。したがって、組織的な支援体制の構築に向けて、どのようなシステムにするのかを考えることが重要なのです。

また、支援の質を高めるためには、人材育成が欠かせません。全ての教員に一定の専門性を身に付けさせるため、学校内・外の研修を充実させ、障害の特性等に関する理解と指導方法を工夫する力や合理的配慮に対する理解を深めることが大切です。また、特別支援学級担任を固定せず、ＯＪＴを働かせながら多くの教員に経験させることも考えられます。

最後に、令和五年の調査では、特別支援学級等での教職経験の無い中学校長は六九・三％です。今から特別支援学級担任になることはできない相談ですが、校長自身が本当の意味で特別支援教育の理念を理解しているか、今一度、問い直すことも必要かもしれません。

（全日中副会長・山口県山陽小野田市立高千帆中学校長）